

説教「今や『霊』によって」

ヨエル 二・一〜五

エフエソ三・八〜二三

牧師 森田恭一郎

今日は、ペンテコステ＝聖霊降臨日の礼拝をささげます。聖霊降臨の代表的聖書箇所は使徒言行録二章の記事です。五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。

聖霊は、十把一からげに下ったというのではなく一人ひとりの上に留まった出来事です。その上で、すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。聖霊降臨日は教会の誕生日と言われますが、一人ひとりが聖霊に用いられ、キリストを証言する教会が誕生した。その一人ひとりに使徒がおり、集まって祈っていた者たちがおり、後にパウロも加えられた。私たちはと言えば、復活のキリストに直接出会った使徒ではありませんが、キリストに救われた者としてキリストを証言する一人ひとりです。

今日のエフエソ書には、聖霊の言及はありません。でも前後に聖霊の記事に挟まれています。

前の部分には五節、正に聖霊降臨の出来事を語っています。この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに知らされていませんでしたが、今や『霊』によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました(エフエソ三・五)。

パウロは、霊によって受けた啓示の内容を語っています。すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものを私たちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束に与る者となるということ(エフエソ三・六)。つまり異邦人の救いのご計画を示されたことを語っています。そして続けて自分のことを証しています。神は、その力を働かせて私に恵みを賜り、この福音に仕える者として下さいました。その際に、神はその力を働かせて、とありますが「その」を「霊の」と理解すれば、パウロ自身にとつての聖霊降臨の出来事を記している訳です。聖霊降臨は彼にとつてそのまま福音に仕える異邦人伝道への招きでありこの招きを受け入れました。

後ろの部分では一六節、どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしつかりと立つ者としてくださるように。使徒パウロの教会の信徒たちへの執り成しの祈りですが『霊』によって信徒たちが強められていく、すなわち教会は誕生の時だけでなく継続もまた『霊』によって支えられ建てられていくようにと祈っている訳です。この霊の働きを前提として、そこに挟まれる形で、今日のパウロの記述がある訳です。パウロ個人にも聖霊降臨がありましたし、私たちにもまた、聖霊の働きが信じます。そして聖霊を拒むことなく受け続け、教会の働きに用いられていきたいと願います。

そして八節です。この恵みは、聖なる者たち全ての中で最もつまらない者である私に与えられました。パウロは他の箇所でも自分自身をこう表現しています。復活のキリストが顕れて下さったことの文脈の中で、そして最後に、月足らずで生まれたような私にも現れました。私は、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。(一コリント一五・八)。あるいは「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。私は、その罪人の中で最たる者です。口語訳聖書では「罪人のかしら」(一テモテ一・一五)と訳されておりました。

そして思えば、私たち人間誰もが、どの一人ひとりと罪人です。ペトロは三度主イエスを知らないと言い放ち、パウロも教会の迫害者だった。でもパウロは、一コリントのこの箇所に続けてこう言いました。神の恵みによって今日の私があるのです。そして、私に与えられた神の恵みは無駄にならず、私は他の全ての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実は私ではなく、私と共にある神の恵みなのです。そういう者たちが教会の誕生に用いられ、その後の教会の働きに招かれ用いられている。聖霊は罪人の頭である者を御業に用いて下さる。使徒とならせてもらった初めだけではありません。使徒となつてから罪人ではなくなりました、ということではない。繰り返し罪人でありながら、その都度、赦され、

罪人のまま、しかし聖霊の御業に用いられる今日の私がある。聖霊の恵みの御業です。立派になった私の業ではなく、繰り返し聖霊の恵みの業です。

終わりに、**落胆しないで下さい**(エフェソ三・

一三)に思いを向けます。パウロはこの時、獄に捕らわれていました。キリストの福音を宣べ伝えるパウロをこの世は理解しない。そして獄に捕らえる。この世の罪を前に「神様どうして？」パウロも思っただけだし、教会の人たちだって思う。でもパウロは、**この苦難を見て、落胆しないで下さい**、と呼びかけます。獄中にある現実を、まずパウロ自身が受取り直しています。キリスト・イエスの囚人となっている私、パウロ(エフェソ三・一)。そしてこうも言いました。だから、わたしたちは**落胆しません**。たとえ私たちの「外なる人」は衰えていくとしても、私たちの「内なる人」は日々新たにされていきます(Ⅱコリント四・一六)。外を肉体、内を精神、と理解しないで下さい。外なる人とは、キリスト教徒として迫害される現実でも、内なる人は恵みによってキリスト信仰の確信が深められていく。

外には世の罪の現実があります。他にも誰かの罪があります。更に罪の現実には信仰者の自分にもあります。それは自分の外なる人です。でも自分の内なる人は、罪赦されて恵みに生きる自分です。誰の罪であれ、落胆せず振り回されずこだわらず、全てを用い、全てを包む神のご計画の成就を信じ、内なる人は日々新たです。今や「**霊**」によってこの新しさに生きるのが、教会の私たちです。